

みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

モザイクタイルの一大生産地・多治見市笠原町。界隈にはタイルメーカーや商社、また釉薬、原料会社などの関連企業が集結。社内にショールームを擁する会社も多く、それぞれ個性あふれる空間となっている。今回は4社を紹介する。

不定期連載 タイルのまち・笠原界隈の ショールームめぐり

多治見市
モザイクタイルミュージアム
開館5周年!



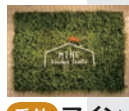
©Akitsugu Kojima

記念展を
開催!
(5ページ)

モザイクタイル
ミュージアム



4 丸万商会



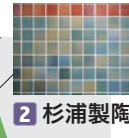
番外 マイン



3 長江陶業



1 セラメッセ



2 杉浦製陶

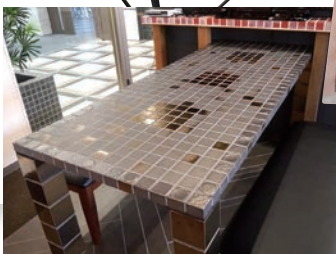
1

タイルで設えた居住空間を提案

セラメッセ(メーカー)

昨年1月、新社屋の竣工とともにショールームをオープン。「設計者の方だけでなく、一般ユーザーの方にもタイルをもっと見ていただきたいです」と広報担当の横田さん。社屋の2階にあるマンションのようなエントランスを入ると、タイルで設えた居住空間が広がる。広いリビングには洗面所や飾り棚も設けられ、テラスを想定した場所も。テーブルはアウトレットの家具を用いて制作したもの。様々なシーンでの色鮮やかなタイル使いは参考になりそうだ。

●一般見学:平日のみ。事前に要連絡(0572-43-3211)



アクセサリにもなりそうな手作りのタイル(上)。
オリジナルのタイルテーブル(左)。



洗面所はブルーのタイルでシックに。右の壁はカラフルで楽しい印象(上)。広々とした居住空間(中)。エントランスの床にも注目(下)。



2

オリジナルタイルを作りたい!

杉浦製陶(メーカー)

3年前にリニューアルしたショールームは大きな窓から笠原の町が一望できる気持ちのよい空間。パネル展示をしているタイルは在庫がある商品で、背景の間接照明の色味を変更し、使用イメージを確認できる。釉薬(色)と金型(面状)見本は特注タイル発注の際、参考にするもの。「いろんな釉薬にチャレンジしています」と社長・林航さん。その数の膨大さに圧倒される。トイレには主に六角形のタイルを使用。明るいショールームに対し、シックな空間となっている。

- 一般見学: 年に数回のイベント時に、ワークショップや工場およびショールーム見学ツアーを開催。
問い合わせ(0572-43-2114)

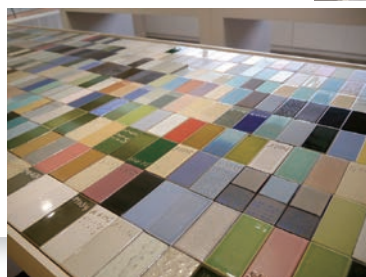


パネル背景の照明は色味を変更可能。ショールームのテーブルと椅子は飛騨木工のものを使用。



トイレの床もモザイクタイル。洗面台下の取手部分にも六角形のタイルを使用(左)。最近はセラミック雑貨にも力を入れる(上)。アウトレット品の販売も。

1000色にもなる色見本(下)。金型見本(右)も多数揃える。



3

社内全体がショールーム!

長江陶業(商社)

駐車場はモザイクで彩られ、社屋に入れば陶壁作品が出迎えてくれる。「社内すべてがショールームです」と社長の虎澤範直さんが話すとおり、そこかしこにタイルが。一階の部屋には展示会で制作したパネルや、気に入って集めた陶器も飾られ、雑貨屋さんのような楽しさ。二階はパネルが棚に並ぶショールームらしい空間となっている。さらに見逃せないのはトイレ。壁は多種類の白いタイルで構成され、複数メーカーの商品を扱う商社ならではの表現が見所だ。

- 一般見学: 平日のみ。事前に問い合わせ(0572-44-2121)



駐車場のカラフルなモザイク壁(上)、陶壁作品は社屋建設当時のもの(下)。



トイレの白いタイル壁(左)とタイルパネル(上)。社内の壁(右)。「様々な組み合わせがアートになります」(虎澤さん)。



イベント時に制作した椅子。

4

一軒家カフェのような空間

丸万商会(商社)

事務所を改装し、今年4月にオープン。ミュージアムから徒歩5分程度と近い場所にある。腰壁や周辺にタイルがあしらわれた一軒家は、カフェのような佇まい。中に入れば青色系や白色系の多様なモザイクタイルに囲まれる。床は元々張られていたタイルを残し、昭和30～40年代の商品見本も併せて展示。新旧のタイルが絶妙にコラボした空間となっている。「いずれワークショップも開催したい」と社長の古田由香里さん。敷地の奥にある事務所ではタイルの販売もしており、一般客も購入できる。

●一般見学：平日のみ。事前に要連絡(0572-43-2201)

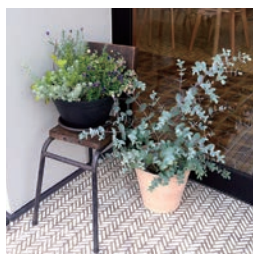


青色系のタイルが多いのは、輸出用のプールタイルを多く扱うゆえ。床のタイルにも注目。

昭和30～40年代のタイル見本。復刻も検討中。



カフェのような外観と入り口。



番外

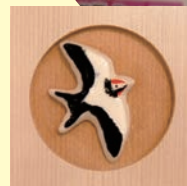
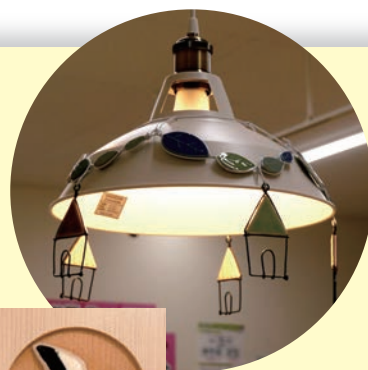
タイルに囲まれてお買い物

笠原ショッピングプラザ MINE

MINE(マイン)は、ミュージアムから徒歩10分ほどの場所にあるショッピングプラザ。建物の外壁、店内壁、トイレなど、至るところにタイルを使用。今年6月にオープンしたキッチンスタジオと交流スペースにもタイルがふんだんに使われている。「タイルの町として地域を盛り上げていきたいですね」と事務局長の和田雅春さん。笠原の銘菓「タイル最中」も扱っているのですお土産にどうぞ。

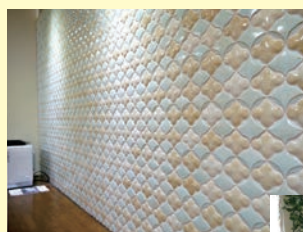
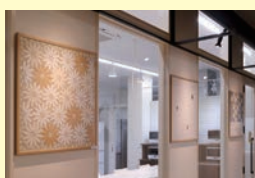
●営業時間：平日10:00～20:00 日曜 9:00～20:00

(キッチンスタジオの見学はinformationにて受付。)
問い合わせ(0572-44-2011)



交流スペース

買い物の合間に一休みできる。テーブルの天板や洗面ボウルにもタイルが。



キッチンスタジオ
本格的な調理設備が揃う
レンタルキッチン。





多治見市モザイクタイルミュージアム
開館5周年記念展
コレクション探訪
モザイクタイルミュージアムができるまで

2016年6月に開館し、今年で5周年を迎える多治見市モザイクタイルミュージアム。これを記念した企画の第一弾として、開館までの歩みを振り返る展示が開催された。

＊新型コロナウイルス感染拡大防止のため、8月24日～9月12日まで臨時休館。記念展は8月22日にて終了。



毎年の周年記念として来場者に配布されたタイル。5枚集めるとミュージアムのロゴマークに。



「コレクション探訪」と銘打っているように、展示はミュージアムの多様な収蔵品で構成。まず目に入るのが腰部分にモザイクタイルがあしらわれたガラスのついた飾り棚。かつて商店街のそこかしこに見られたもの、昭和の文化を伝える貴重な存在だ。

約1万点にも及ぶこうした収蔵品の基盤は、タイル業界の有志が中心となり、「タイル博物館」の設立を念頭に、全国で収集してきたもの。その活動のはじまりは20年も前に遡るといい、長年の願いが実ったの開館であったことを実感する。展示品に添えられた当時のメモ書きや手書きの「タイル資料調査票」から



「正方形を分割した商品が多くあった時代の中で、この商品は5分割された珍しいパターンであった」（調査票のメモ書きから）。スーパー／笠原・羽根タイル／昭和39年頃



タイル資料調査票。収集活動の現場を担ってきた安藤隆望氏による調査記録。



(奥)旧早崎時計店柱時計台座／清林製陶、日の出タイル／昭和25年頃
(手前)旧広見湯(可児市)壁画 4分角モザイクタイル／昭和25年頃

駄菓子屋とパーマ屋を兼ねた「しんみせ」の前に置かれていた棚。
しんみせ(瑞浪市)飾り棚／昭和35年頃(創業)



は、収集活動を担ってきた人たちの存在が浮かぶ。ときには壁や床の一部を切り離し、それなりの重量もある収集品を運搬するには、かなりの労力を要しただろう。

収集品が保管されていた「モザイク浪漫館」についても写真で紹介。宣伝をしないにもかかわらず噂を聞きつけ、のべ400人以上が来館したというから、タイルファンの情報網と行動力に驚かされる。

ほかに営業用の革の鞆や鏡、鉄道の荷札など、通常の企画展では展示の機会がなかった、少々変わり種の(?)収蔵品も披露された。

多彩な収蔵品や資料を通し、開館を実現させた多くの人々の熱意が伝わる展示である。



モザイク 浪漫館

タイルが張られた腰壁が目印の小さな建物は、知る人ぞ知る“タイルの聖地”。所狭しと置かれた大量の収集品に驚いた人も多かったとか。残念ながら建物は今年のはじめに解体。



営業ツールの鏡。見本を提示する際、囲むように立て、広い面積に張ったイメージを見せる。
鏡／(株)タイルパネル／昭和50年頃
三分五厘角アート／昭和30年～35年頃

珍しい収蔵品も！

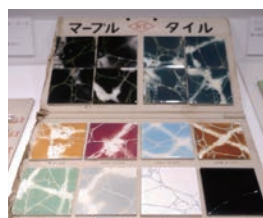


使い込まれた営業用の鞆。荷札には当時存在していた笠原鉄道の「笠原駅」が発駅として書かれている。
左：営業用鞆(女性用)／昭和30年代
右：営業用鞆／昭和30年代
手前：荷札／昭和時代(戦後)



戦後 笠原モザイクタイルのあゆみ

本展示手前のギャラリースペースでは、戦後のモザイクタイル産業の経緯をまとめた年表を掲示した。併せて年代順にタイルの見本台紙を展示。デザインの移り変わりが見て取れる。



マーブルタイル／春日井・広正製陶／昭和15年頃



寸八タイル／笠原・高山製陶／昭和23年頃



美術タイル／多治見・三光陶苑／昭和49年～

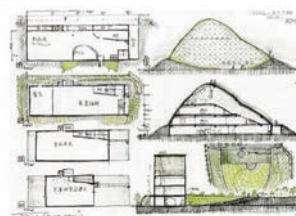


さくら石／笠原・山萬製陶／昭和45～50年頃

次回展示 予告

開館5周年企画展 藤森照信とモザイクタイルミュージアム

モザイクタイルミュージアムをデザインした藤森照信氏が第12回国際陶磁器展美濃デザイン部門の審査員長に就任。これを機に、ミュージアムの建築に焦点をあてた企画展を開催。全体の構想から、ディテール、素材、工法、タイルの使い方などを紹介し、「藤森建築」の魅力を読み解く。



©Terunobu Fujimori



©Yuna Iwase

会期 2021年9月18日(土)～2022年1月10日(月・祝)

休館日 月曜日(休日の場合は翌平日)、12月29日～1月3日

関連 企画

記念対談 藤森照信×安藤雅信(陶作家)、藤森照信×村瀬良太(建築史家)

日時 9月17日(金)午後1時30分～午後4時30分

定員 300名(予定、申込制)

会場 笠原中央公民館 アザレアホール



©Yuna Iwase

INAXライブミュージアム展覧会

DISCONNECT/CONNECT

【ASAO TOKOLO×NOIZ】

幾何学紋様の律動、タイルの宇宙

INAXライブミュージアム「土・どろんこ館」では、美術家・野老朝雄氏と建築デザイン事務所「noiz」による企画展を開催中（～10月12日（火）まで）。昨年夏、オンライン展となった東京のLIXILギャラリー（2020年9月閉廊）の展覧会に続くもので、今回は実展示が実現。タイルと映像、音楽によって生み出された動的な空間を体感できる。

訪れたのは太陽が照りつける7月。外のまぶしさと一転し、ほの暗い会場に入ると、深い青色の様々な紋様が浮かび上がるなか、ひんやりとした空気に包まれた。

紋様の作者は野老（ところ）朝雄氏。同氏はシンプルな図形で平面を隙間なく埋め尽くす「タイルング」の世界で、幾何学による無数の連続性や様々な展開性を特徴とする「野老紋様」を数多く制作。今回の展示ではこの野老紋様とタイルのコラボレーションが実現した。

展示は2つのスペースで構成。会場に入っすぐの空間中央には、菱形のタイルピースで構成した12角形の作品がゆっくりと回転。タイルの表面には凹凸があり、見る角度や照明の当たり具合で多様な表情を見せる。

それを10台のスタンド式のタイルパネルが取り囲む。紋様が転写されたタイルは3種類のサイズがあり、組み合わせによって異なる印象となるのが面白い。

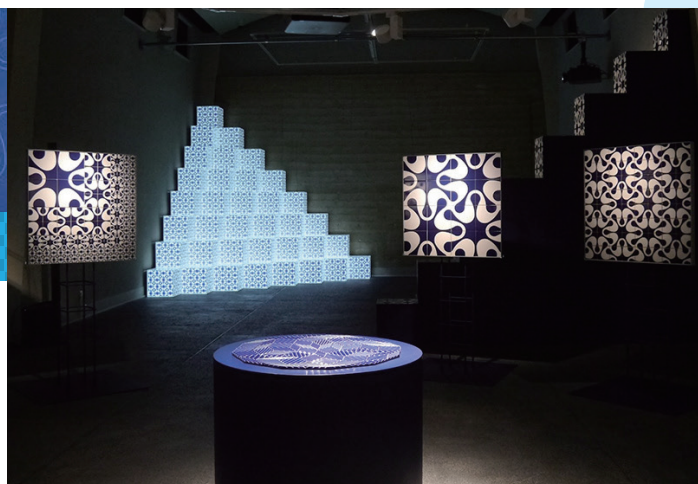
タイルはすべて
LIXILやきもの工房にて製作

「RHOMBUS WORKS [JAGGED]」

菱形タイルは鋳込成形にて制作。組み替えが可能で、そのパターンは膨大な数となる。「タイルの尾根と谷の部分で色の濃淡ができるのが面白い」とnoizの豊田啓介さん。

「INTERTWINED」

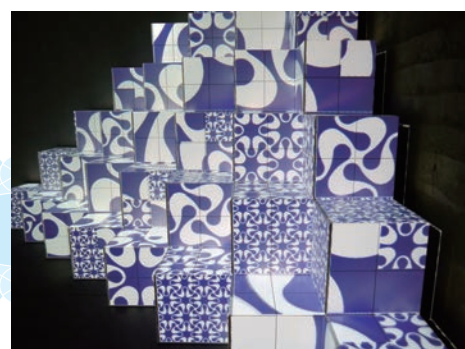
50mm角、100mm角、200mm角サイズで展開する、転写タイルによる作品。組み合わせによってペンギンや犬の顔のようにも見える。



永遠の広がりを感じさせる「野老紋様」。野老氏は東京2020オリンピック・パラリンピックのエンブレムに採用された「組市松紋」の作者でもある。

「STEPS」

2棟のピラミッド状の構造物は200mm角のタイルを張り合わせた1辺400mmのキューブを8段積み上げたもの。1棟はプロジェクションマッピングの作品（右）。その前で、自分自身に紋様を投影させる楽しさも。



奥のスペースではタイルキューブによってつくられたピラミッド状の構造物2つを対面に設置。一方は紋様を転写したタイル、もう片方は白いタイルで構成。白いタイルには紋様が次々に展開するプロジェクションマッピングを投影。自らが発光しているかのように光を拡散するタイルに、紋様が有機的に変化していく様子を見ているうち、不思議な感覚に包まれる。

紋様、タイル、デジタル技術の三者の融合が生み出した新たな表現は、展示空間に身を置いてこそ面白さを体感できる。ちなみに再利用を視野にタイルはすべてマグネットを用いて施工。「廃棄物ゼロ」という試みもこれからの時代に求められるものだろう。

INAXライブミュージアム

愛知県常滑市奥栄町1-130

開館時間

10:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日

水曜日（祝日の場合は開館）

ウェブサイト

<https://livingculture.lixil.com/ilm/>

